

## ここさこ通信 ～福島の話聞くこと～

2020年夏はコロナと猛暑だったと記憶に残るのでしょうか。はやく、そういえば…となりたいものです。

県外避難者の支援活動でお会いするみなさんには福島という「ふるさと」があります。辞書でふるさとを調べると、故郷、郷土、国（くに）、国もと、いなか…と類語がたくさんあります。ことばは使われるほど形をかえ、広がるといわれますから、人々がいかにこのことばたちを口にしてきたかが想像されます。

人がなにがしかのことばを口にするとき、そこにはこころのあり様や動きが同居します。イメージや情感といわれるものです。ことばを耳にするとき、口にした人のそれらが意味とともに届いてきます。そうやって聞いた人のこころでもイメージや情感に動きが生じます。

これまでたくさんの福島のみなさんとお話をする機会がありました。場所は静岡です。県外避難者のみなさんは、静岡から、福島を語ります。福島での暮らしを教えてくれる人がいます。住んでいた家、近所の風景、畑、食べたもの、気候、仕事、人…。きっと頭のなかにはそのイメージが浮かび、からだに残る感触を思い出していらっしやることなのでしょう。聞いている私たちはそれを思い浮かべます。

たまにふと気づきます。みなさんの雰囲気、同郷の人や福島県の職員さんと福島について話されるとき、私たちと話すときのそれが、少しだけ違うような気がします。そこには同じものを感じて生活してきたという共有の土台があるのでしょうか。少しうらやましく思っています。

私たちスタッフも福島を感じたくて、そして感じた福島を静岡で会うみなさんと共有したくて、福島に視察に出かけたこともありました。いわゆる被災地だけでなく、道中の山々、川、街並み、地元の食べ物、そして人を感じました。共有のかけらをひろう視察でした。

おひとりおひとりの「ふるさと」はユニークで同じものはありません。県外避難者のみなさんが語る「ふるさと福島」はどんなところなのか。共有できるイメージや光景や感情はかけらのようなものですが、わずかな共有から私たちも福島を感じられます。また聞かせてもらうのが楽しみです。